

運動に親しむ資質・能力を育てる授業づくり —サーキット運動の導入と体育ノートの活用を通して—

和歌山市立砂山小学校
教諭 木村 光

【要旨】

本研究では、小学校体育科「マット運動」の領域において、サーキット運動の導入と体育ノートの活用を通して、運動に親しむ資質・能力を育てる授業づくりを提案する。具体的には、「技の指導系統表」を基に、単元の見通し表を作成することで、単元のゴールを明確にするとともに、授業の導入部分にサーキット運動を位置付け、主運動につながるよう考えた。また、体育ノートを活用することで、話し合い活動の充実を図る。これら体育科授業モデルに沿って指導を行った結果、子供が適度な運動量を確保でき、「する、みる、支える、知る」の多様な関わり方につながることで、運動に親しむ資質・能力が高まった。

【キーワード】

運動に親しむ資質・能力、技の指導系統表、体育科授業モデルの構築、単元の見通し表、サーキット運動、体育ノート、話し合い活動

1 研究主題の設定と背景

筆者のこれまでの体育科授業をふり返ると、準備運動はグループごとに子供同士で行い、主運動においても、課題に応じた動きや作戦について、グループ学習を中心に組みこんできた。これにより、一定の運動量を確保し、技能の上達にもつながったと考えている。しかし、その活動の中で、運動の得意な子供は進んで取り組むことができるが、苦手な子供は身体活動が少なくなったり、友達同士で積極的に技や作戦についての話し合いができていなかったりという課題が見られた。所属校における前年度の全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果を分析すると、運動能力調査では、各学年とも長座体前屈以外の項目でほぼ全国平均を下回っていた。また、運動習慣に関する調査では、体育科授業以外の運動やスポーツの実施状況が週に1回、もしくは運動しないという回答の割合が、和歌山県全体では約67%であるのに対して、所属校では約75%と上回り、運動に親しんでいるとはいえない状況が明らかになった。さらに全く運動しない子供は、このうちの約14%であり、運動する子供と運動しない子供の差が大きく、二極化傾向が見られる。これは現行学習指導要領改訂時から課題となっていることである。

平成29年3月に公示された小学校学習指導要領体育科の目標は、次のとおりである。

体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。
- (2) 運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。
- (3) 運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。

改訂では、前文と体育科において育成を目指す能力を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で示し、この三つを視点とした授業改善が求められている。所属校の課題解決と今後の指導の方向性や視点を考えたとき、体育科の運動領域において、特に子供たちの技能習得と体力向上を目指さなければならないこと、そして、その素地として運動に親しむ資質・能力(注1)を育てることが重要であると考え、授業づくりにおいて本研究テーマを設定した。

2 研究の内容

本研究を進めるに当たって、まず子供たちの技能習得と体力向上について考える。当然のことながら体育科の授業を中心にしながらも、それだけではなく、学校教育全般における体育行事や業間体育の取組、地域で行われている社会体育の諸活動、家庭における運動機会等の増加を含めた全般的な取組が必要となる。従って、本研究で取り組む体育科の授業づくりだけで、子供の体力が十分に向上したかどうかを図ることは難しい。しかしながら、体育科の授業でしっかりと運動量を確保し、技能の上達につながるような活動となれば、体力向上だけでなく、子供たちの意欲も向上し、休み時間や放課後、家庭での運動に結び付くことが期待できる。具体的には、技能習得の過程において、「技が自分のものになる実感」につながる工夫を取り入れる。「技が自分のものになる実感」とは、その技のポイントが分かり、言語化し、動作化できることと考える。競技や運動の理解、技の習得を目標に自分の課題を見付け、友達とともに考え、互いに助言し合いながら、解決に向けて試行錯誤できる力を子供たちに身に付けさせたい。

こうした研究内容を具体化し、授業づくりの方策とするため、田辺市立田辺第一小学校研究紀要(2015)にある体育科授業実践を先行研究とし、マット運動における授業づくりについて取り組むこととした。運動領域においてマット運動を選択した理由は、①多様な動きを習得できる、②「回る・跳ぶ・柔軟性・筋力」などの運動学習全体の基礎が含まれており、各運動領域への広がり期待できる、③器具を使わず、平面上で行う運動であり、安心して取り組める、と考えたからである。

以上を基に、研究を進めるに当たって、(1) 技の指導系統表の作成、(2) 体育科授業モデルの構築、の研究内容2点について具体的な方法を示すとともに、提案授業を行い、結果を検証する。研究構想図を図1に示す。

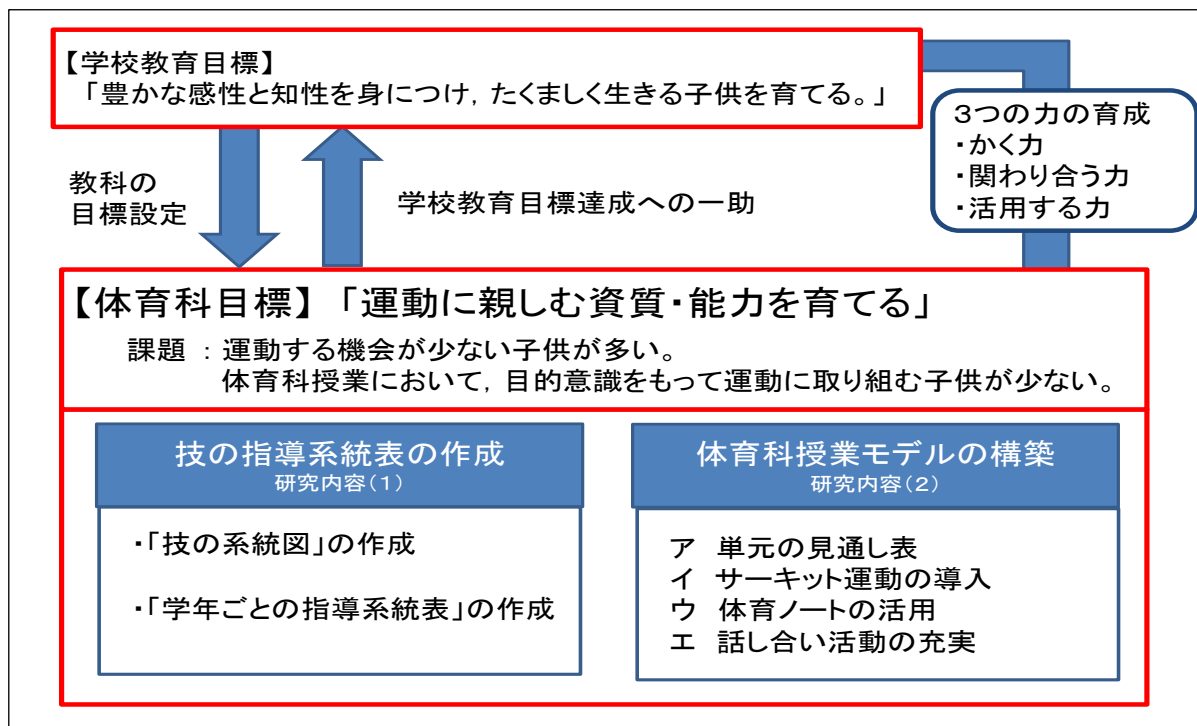


図1 研究構想図

(1) 技の指導系統表の作成

小学校体育科における器械運動の学習について、身体と認識の発達段階を考慮した「技の指導系統表」をマット運動の単元で作成し、実践を通して検討を行う。「技の指導系統表」の作成においては、小畑ら(2012)の「技の配列表」を参考にする。まず、技を系統図にまとめることで、「各学年における系統的な目標(ねらい1・2)」を設定し、その目標に

沿って学習させる「技の指導系統表」(表1)を作成した。

これにより、全教員が運動の系統性を意識し、小学校6年間の見通しをもった指導をするための手立てとする。また、子供がこの表をいつでも見られるようにすることで、当該学年のみならず次学年で学習する技に興味をもたせ、これまでに習得した技のふり返りにつなげることができる。

表1 マット運動における「技の指導系統表」

※(ねらい1)・・・できる技をより大きく、きれいに取り進む技 (ねらい2)・・・各学年で習得したい技、必ず取り進む技

低学年		中学年		高学年	
1年	2年	3年	4年	5年	6年
ゆりかご	ゆりかご	(ねらい1) ゆりかご	(ねらい1) 前転	(ねらい1) 大きな前転	(ねらい1) 前転技
ジャンプ・バランス	ジャンプ・バランス				
動物歩き	動物歩き	カエルの足打ち	後転	きれいな後転	後転技
・イス	・イス				
・ウマ	・ウマ	ブリッジ	大きな前転	開脚前転	側転技
・アザラシ	・アザラシ	横転	きれいな後転	開脚後転	縦倒立
・シャクトリムシ	・シャクトリムシ				
・ウサギ	・ウサギ	前転・後転	川跳び側転	側方倒立回転	補助倒立
カエルの足打ち	カエルの足打ち				
ブリッジ	ブリッジ	(ねらい2) 大きな前転	(ねらい2) 開脚前転	(ねらい2) 純び前転	(ねらい2) 伸膝前転
アンテナ(首倒立)	アンテナ(首倒立)	きれいな後転	開脚後転	伸膝後転	倒立(倒立助転)
横転	横転	川跳び側転	側転	壁倒立	ロンダート
前転 など	前転・後転 など		側方倒立回転	補助倒立	発展技(転回系)
(ねらい2) 多様な動きを取り入れる。					
6時間	8時間	6時間	7時間	7時間	7時間

単元における学習のねらいについては、「既習の技に磨きをかけ、新たな技に挑戦することができる。」とし、各時間のねらいについては、次の2つの段階で設定する。
 ねらい1: できる技をより大きく、きれいにできる。(自分の理想のイメージにできる。)
 ねらい2: 新たな技に挑戦する。

ねらいを2段階に分けることで、スパイラルに取り組み、仲間とともに技の見合いや教え合いを通して、技能の向上を図る。

(2) 体育科授業モデルの構築

今回の研究では、単元及び各時間の授業モデルを作成し、提案授業で効果を見取ることとした。また、実践の中心に田辺市立田辺第一小学校(2015)のサーキット運動や体育ノート据えるとともに、単元の見通し表(表2)、話し合い活動の充実留意し、単元及び授業構想を行うこととする。

表2 マット運動(4年生)単元の見通し表

ア 単元の見通し表

「技の指導系統表」

(表1)のねらいを子供のめあてに位置付け、①種目、②単元時数、③各時間の大きな展開(時間配分)、④単元目標、⑤ゴールでの活動(評価場面)を示した「単元の見通し表」(表2)を作成した。⑤については、めあて2を発展させ、活用場面として、

① 「マット運動」 **めざせ！体操名人！金メダル！** の 活動内容

1	2	3	4	5	6	7
② 児童に向けてのねらいを知る。(10分)						
・めあてを知る ・各グループで準備運動 ・準備(6分)						
サーキット運動を知る。(5分)						
サーキット運動(5分)						
(めあて1) 今まで取り組んだ技をしよう。【さらに上手になるう。】(15分)	(めあて1) できる技をより大きく、きれいにしよう。(14分)	(めあて1) できる技をより大きく、きれいにしよう。(12分)	(めあて1) できる技をより大きく、きれいにしよう。(10分)	(めあて1) できる技をより大きく、きれいにしよう。(10分)	(めあて1) できる技をより大きく、きれいにしよう。(10分)	(めあて3) できる技を生かして、連続技や組み合わせ技をしよう。(16分)
(めあて2) 開きゆく前転に挑戦しよう。(12分)	(めあて2) 開きゆく後転に挑戦しよう。(14分)	(めあて2) 側転に挑戦しよう。(16分)	(めあて2) 側方倒立回転に挑戦しよう。(16分)	(めあて2) 側方倒立回転に挑戦しよう。(16分)	(めあて3) できる技を生かして、連続技や組み合わせ技をしよう。(16分)	「技の組み合わせを発表する」⑤(10分)
今日のふり返りを体育ノートに書く。(5分)						
かたづけ(5分)						
かたづけ(3分)						
④ ☆みんなで協力して、自分のオリジナルな演技をめざそう！						

できる技を生かして、連続技や組み合わせ技を考えたことを発表する場となるめあて3へとつなげる。これにより、子供がゴールで何をやるか、また各時間に習得すべき技が何かが予めわかるようにした。また、各時間の大きな展開も示し、45分の授業を教員がタイムマネジメントすることで、運動量を確保するとともに、子供たちが次の活動を見通しながら自らの課題解決に取り組めるようにする。

イ サーキット運動の導入

授業の導入部分では、めあての確認、場の準備とグループでの準備運動をできるだけ短時間で行えるようにし、これにサーキット運動を加えてルーティン化する。サーキット運

動については、本時の主運動につながる筋力、支持力、バランス等を鑑みて設定し、毎回6種類程度のバリエーションで行うこと、時間は約5分とし、汗をかく程度の運動量を確保すること、単元の中で、子供の実態に合わせて内容を少しずつ変化させること、の3点に留意して行う。表3で示すサーキット運動の一例の中から、子供の実態に合わせ、「本時のめあて」に合ったメニューを選択する。これにより、「今持っている力」では運動を楽しむことが難しい子供の、運動に関する技能を一定水準に上げながら主運動につなぎ、技能の習得を目指すこととした。

これは、学習指導要領改訂の方向性で示されている三つの柱のうち、「知識及び技能」の習得に関わるところであり、特に主運動の特性に応じた各種の準備運動への理解につながると考える。はじめは教員が内容を示すところから始まるが、徐々に子供たち自身で主運動を見通して、サーキット運動の内容を考え、構成していくことを目指したい。

ウ 体育ノートの活用

指導と評価の一体化による学習指導の有効性について、鈴木(2010)は、運動を正しく理解させた上で、ポイントの指導と評価によるフィードバックを行いながら練習を繰り返せば、運動技能を向上させることができるとしている(※1)。

このように、知識と技能を関連させて学習することの有効性を踏まえ、主活動における技の習得において、体育ノートを活用する。体育ノートは、

- ①日付
- ②単元名
- ③学習課題・めあて
- ④本時で習得すべき技についてのポイント
(自分の考え、友達の考え、授業の中で大切なこと。)
- ⑤分解図
- ⑥体育作文

で構成する(図2)。

この中で特に重要と考えたものは、分解図である。これまでの筆者の授業では、技の習得を教員の示範演技と説明で行うことが中心であった。しかし、これでは教員がポイントを教えることが中心になり、子供自身が自分や友達の課題(つまづき)を見つけたり、よりよい動きへの視点を考えたりすることにはつながりにくい。分解図は、連続した5~7コマの動きを示した絵図であり、技の全体像と各段階の手足の動きがよく分かる。田辺市立田辺第一小学校の先行研究ではこのコマに着目させ、子供がポイントを見出す活動を取り入れることで、グループ学習時に、課題発見やその共有に役立てることとしている。ただし、ポイントの記入は、「実技練習」と「書く」の2つの作業を並行させると、安全性・運動量の確保等に影響を与えることから、授業終末部のふり返り時に行うこととした。

表3 サーキット運動の一例

<p>【支持力アップ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おしずもう(ベアになり、お互いの手のひらを合わせて押し合う) ・アザラシ歩き(下半身を床につけ、手で支持しながら移動する) ・うで立てふせ (ひざ、つま先、つま先伸ばし、片足、拍手のバージョン) ・カエルの足打ち(マットに手をつき、ジャンプしながら足で拍手する) ・ウサギジャンプ(両足をそろえてジャンプし、手を前方につきながら移動する) ・すべり台手おし車(ベアになり、補助者に足【ひざ部分】を持ってもらいながら、手の力で移動する)
<p>【バランスアップ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなで座る・立つ(複数で背中を合わせ、立ったり座ったりする) ・スキップ ・バックスキップ ・とびこえ(マットやフラフープ等を連続ジャンプして飛び越える) ・カニ足歩行ジャンプ(腕を横に伸ばし、横向きにスキップしながら移動する) ・バランス(Y字、V字、ヒコキ等)
<p>【スキルアップ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゆりかご(座った姿勢で、背中をまるくして前後に転がる) ・両足ジャンプ(足をそろえ、前向きや後ろ向きにジャンプして移動する) ・片足ジャンプ(ケンケン) ・マット越え(マットに手だけつき、倒転の動きのようにして、マットを飛び越える) <p>*印は、移動を伴わないもの、実施する場合は、それぞれ20~30秒間で行う。</p>

<p>① 日付</p> <p>② 単元名</p> <p>③ 学習課題・めあて</p> <p>「 」</p> <p>④ ・自分の考え ・友達の考え (○○さんより) など ・授業中での大切なこと</p> <p>⑤ 分解図</p> <p>本時のめあての運動(技)の連続した図を貼り、その部分に動きのポイントを書き込む。</p> <p>⑥ まとめ・ふり返り(体育作文)</p> <p>・今日分かったこと(ポイント)は・・・ ・自分の考えは○○さんと似て(違って)・・・ ・自分の考えは、話し合いの中で変わって・・・ ・もっと知りたいことは・・・</p>

図2 体育ノートの記入内容

次に重要と考えたものは、体育作文である。これまでは、体育の時間に書く活動を取り入れることは少なく、ふり返りも十分に行えていなかった。しかし、単元での学びを言語化し、記録することは、子供の主体的な学びにつながるという点で大切であると同時に、教員が技能面以外の子供の成長を見取るためにも重要となる。

新学習指導要領における「どのように学ぶか」という視点においても、子供の主体的・対話的な学びの実現が求められていることを踏まえ、それを具体化する手立てとして、分解図や体育作文は有効に作用すると考える。

エ 話し合い活動の充実

子供が主体的に考え、ふり返りを深めるために、教員が本時で挑戦する技を精選することで、話し合う内容を焦点化できるようにする。また、拡大した分解図や体育ノートを活用する中で、子供たちが競技や技のポイントをつかみ、上達度合いや技能の差を超えて、よりよい動きや改善点を活発に話し合えればと考える。その点において、話し合う場を設定することは、新学習指導要領の育成を目指す三つの柱の能力の一つである「思考力、判断力、表現力等」に示されている「運動について、自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養うこと」につながると考える。

本単元では、主運動における子供たちの発言を見取るとともに、体育作文へのふり返りの観点として、友達との話し合いで気付いたことを書き込んでいくよう指示し、単元を通した変容を捉えていきたいと考える。

3 所属校における授業研究

平成29年10月から11月にかけて、所属校の第4学年（2学級71名）を対象に、体育科「マット運動」において、運動に親しむ資質・能力の育成を目指した授業研究を実施した。

マット運動の単元に入る前に「技の指導系統表」（表1）を作成し、それを基に研究授業計画（表4）を立て、各時間にどのような技に取り組むのか、学習内容を整理した。

体育科授業モデルの構築では、運動に親しむ資質・能力を育てることを重視した授業の具体として、研究内容（2）に示したア～エの4点について、オリエンテーション時と第4時の授業展開（図3、図4）を一例として、授業展開に沿って述べる。

（1）単元の見通し表

オリエンテーションにおいて、まず単元の見通し表（表2）を子供たちに配付した。単元の見通し表を手にした子供たちから、「この技をやってみよう。」や「最後にどんな技の組み合わせをしようかな。」等の意欲的な声が聞かれた。続いて、単元の見通し表に沿ってマット運動での心構えについて話し合いを進めた。その後、事前アンケートを記入し、子供の実態把握を行った。

（2）サーキット運動の導入

授業の導入では、前時のふり返りを行った後、毎時間、課題を知ることから始めた。この課題は、「技の指導系統表」で示したねらい2の挑戦する技に対して「～のポイントを見つけよう」と一つの方向目標を示しており、全員が共通した目的意識をもって取り組めるようにすることをねらいとしている。

サーキット運動の場では、「側転」に必要な「支持力」「バランス」「スキル」の観点でメニューを考えた。第4時の「側転」の技能習得に関しては、自分の体重を支える「支持力」が重要になってくると考え、②アザラシ歩き、③ウサギジャンプ、⑤カエルの足打ちに重

表4 研究授業計画

時数	実施日	主な学習内容
オリエンテーション	10/23(月)	学習の心構え、事前アンケート
第1時	10/24(火)	マット運動の見通しを持つ。
第2時	10/26(木)	開脚前転のポイントを見つけよう。
第3時	11/1(水)	開脚後転のポイントを見つけよう。
第4時	11/7(火)	側転のポイントを見つけよう。
第5時	11/9(木)	側方倒立回転のポイントを見つけよう。
第6時	11/16(木)	技の組み合わせ技を考えよう。
第7時	11/17(金)	技の組み合わせ技を発表しよう。
まとめ	11/21(火)	事後アンケート、全体のふり返り



点的に取り組んだ。また、⑥マット越えは、「スキル」の観点で、「側転」につながる動きができるように配慮した。どの子供も、みんなと同じ流れに沿って取り組めるように、体育用太鼓でリズムを取りながら進めた。

学習活動	学習内容	主な支援(・)と評価(※)
* 前時のふり返り		
1 課題を知る	側転のポイントを見つけよう。	 <p>サーキット運動</p>
2 準備運動・準備	○各グループで準備運動をする。 ・ねらい1の場の準備をする。	
3 サーキット運動	○サーキット運動をする。 ①カニ足歩行ジャンプ×4 ②アザラシ歩き×2 ③ウサギジャンプ×2 ④ゆりかご(20秒) ⑤カエルの足打ち(20秒) ⑥マット越え(手をついて)	
		<p>本時のねらい2の技(側転)につながるサーキット運動を取り入れる。 前時の授業の取組の様子や体育ノートのふり返りから、「<u>支持力</u>」「<u>バランス</u>」「<u>スキル</u>」の観点で、サーキット運動の内容を考える。</p>

図3 第4時 授業展開①(サーキット運動の導入)

(3) 話し合い活動の充実

「技の指導系統表」に示したねらい1の活動では、技を磨く時間として、各グループで互いの動きを見合いながら運動を楽しんだ。その後、ねらい2の活動に入る前に集合し、拡大した分解図を用いて「課題のポイント」を全員で確認した。分解図を用いることで、子供たちから視覚的に分かりやすく、技のポイントに絞った意見が出された。そして、ねらい2の活動後、再度集合し、再び拡大した分解図を用いて「側転」のポイントを子供たちで話し合い、まとめた。話し合う場面においては、新しい技に挑戦する前と挑戦した後の2回に分け、子供から出た技のポイントを、教師が色別に分けて分解図に書き込むようにした。また、話し合い終了後、体育ノートに記入する時間を設けた。

4 <u>ねらい1の活動</u>	○各グループでねらい1の活動をする。	 <p>話し合い活動</p>
5 <u>ねらい2の活動</u>	○側転(側方倒立回転)に取り組む。 ・どのようにしたらできるか、話し合う。 ・話し合ったことを基に、各グループに分かれて取り組む。	
6 <u>ふり返り</u>	○体育ノートに側転のポイントをまとめる。 ・今日のポイントを発表する。	 <p>主運動のふり返り</p>
7 片付け		

話し合う場面において、ねらい2の技を拡大した分解図を用いて、話し合う。話し合った内容を体育ノートにまとめることで、次時の活動につなげる。

ミニふり返り

体育ノートの活用

体育ノートの記入

(体育ノート)

図4 第4時 授業展開②(話し合い活動の充実)

(4) 体育ノートを活用

授業後の子供の体育ノート(図5)を見ると、体育作文では、「初めは全然できなかったけど、腕を伸ばしたり、足を徐々につけたりなどのコツをつかんだ。」という技に関するポイントを書いていた、「～君を見て、助走をつけることが分かった。」など、友達との関わりから学んだことの感想が見られた。また、分解図の中に記してある番号を使うことで、部分ごとの技の動きのポイントとして気付いたことが書けていた。

検証を行うに当たっては、「事前・事後アンケート」、「体育ノートにおける分解図と体育作文のふり返し」の2つに分類し、それぞれの結果を数値化し、検証データとした。まず、「事前・事後アンケート」については、8項目の質問に対して子供が4件法で回答した結果を数値化(注2)し、示した(表5)。

次に、「体育ノートにおける分解図」については、分解図に書き込んだ各時の技のポイントの平均記入数を示した(表6)。

また、言語活動を通じた友達との関わり合いの度合いを見取るために、体育作文において、各時の友達との関わりが見られた記述の回数を数値化した(表7)。

なお、技能面の評価については、各時の動きや技の発表会での観察等を基に、学級担任と協議した結果、決定した。

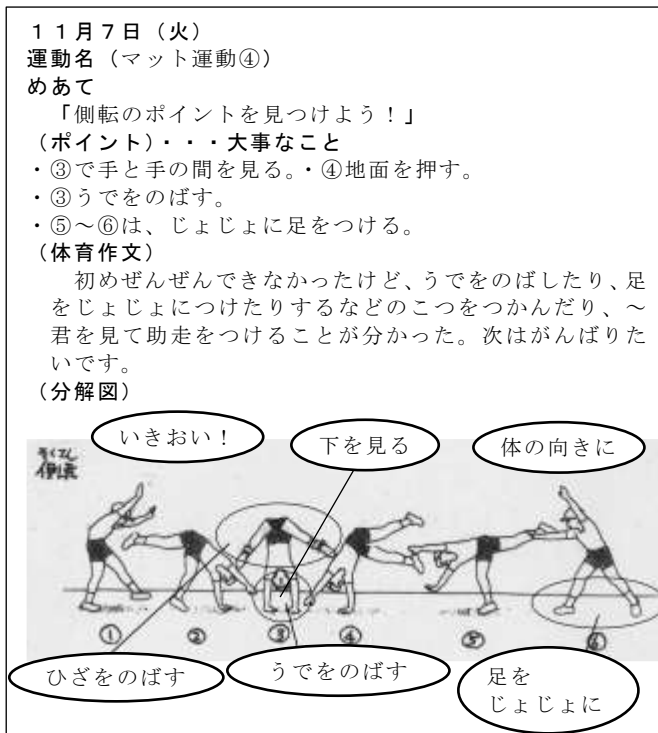


図5 体育ノート(子供の記述を転記したもの)

表5 事前・事後アンケートの結果(n=71)

	事前	事後	差
1. 体育は好きである。	3.0	3.4	↑0.4
2. マット運動は好きである。	2.8	3.4	↑0.6
3. 体育で自分のめあてを立てて活動することができる。	2.7	3.3	↑0.6
4. 友達と教え合って運動している。	2.7	3.3	↑0.6
5. めあての運動をする前に、じゅんぴ運動は、しっかりできている。	3.5	3.8	↑0.3
6. 体育の時、うまくできる方法を考える。	2.7	3.4	↑0.7
7. 休み時間は、外で遊んでいる。	2.8	2.8	0
8. 何かスポーツを始めたいと思う。(スポーツをしていない人)	2.3	2.8	↑0.5

※ ↑は差がプラスになっていることを表す

表6 分解図に書き込んだ技のポイントの数の全体平均(n=71)

第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時
前転 大きな前転	開脚前転	開脚後転	側転	側方 倒立回転	※技の組み合わせと発表会のため、分解図を使用していない。	
0.77	2.07	2.42	2.41	1.94		

表7 体育作文で友達との関わりがあった回数(n=71)

第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時
前転 大きな前転	開脚前転	開脚後転	側転	側方 倒立回転	組み 合わせ技	発表会
21	33	36	53	28	31	37

4 成果と課題

研究内容の効果について、前項で示した検証データと成果物、授業者の見取りから、成果と課題を述べる。

(1) 成果

技の指導系統表の作成については、第1時の体育作文から、「前転のこの部分を、ゆりかごになるように」と、第3学年での既習内容と関連付けた考えを書いていた事例もあり、技の系統性を意識できていることがうかがえた。また、「単元の見通し表」を参考にすることで、子供は本時の技が次時以降どのようにつながっていくのかが分かり、見通しを持つことができた。さらに、単元の終末にかけて、体育作文に、「側転の時に、最後まで座ってしまうので、家で頑張りたいと思います。」や、「家でも練習して、発表の時きれいにしたいです。」など、体育科授業以外でも取り組もうという感想が増えてきていることから、学びに向かう姿を見取ることができた。

体育科授業モデルの構築の成果は、子供の学習意欲を高め、目的意識をもって友達と関わり合いながら学習できたことである。これは、サーキット運動や体育ノートなどの新しい要素の負荷が増えたにもかかわらず、事前アンケートと比べると、全体的に事後アンケートの数値が上がっている(表5)ことからわかる。また、体育ノートの体育作文には、友達との関わりについて、「友達が技のやり方を手伝っているのを見ていいなと思い、僕も手伝ったら、だんだん友達も出来てきて嬉しかった。」や、「勉強と一緒に、工夫やどうすればできるか考える。」という感想から、子供が目的意識をもって運動に取り組めたり、思考したりしたことがわかる。

サーキット運動の導入では、子供の体力の実態に応じて、主運動に必要な技能面を強化できるような運動へと、サーキット内容の一部を変更していったことで、「サーキット運動はとても楽しいし、準備運動にもなるからいい運動だなと思った。」等の感想が体育作文から見られ、サーキット運動における技能面ばかりでなく、運動に対する意欲の向上がうかがえた。

体育ノートの活用では、分解図の使い方について、初めは子供たちに戸惑いが見られたように感じる。しかし、友達の工夫された体育ノートを紹介したり、教室に掲示したりすることで、分解図を使用する子供が増加した(表6)。また、分解図を使って技を比較することから、明確になったポイントを意識して取り組んだことが、「側転ができなかったけど、こつをつかんだので、またできると思います。」という体育作文の感想から見てとれる。体育ノートはこうした子供の思考力・判断力・表現力等について、評価として活用できることが大きな利点といえる。

話し合い活動の充実では、分解図を拡大し、本時のめあてに沿って、話し合わせる時間を確保した。さらに、本時に挑戦する技を限定することで話し合いのポイントが焦点化され、活発な意見を出し合うことができた。また、話し合った内容を体育ノートに整理することで、毎時の学びを蓄積することができた。話し合いの場面は、新しい技に挑戦する前と挑戦した後の2回に分けて行った。拡大した分解図に子供から出た技のポイントを2回に分けて書き込むことで、子供たちは、友達とともに本時の技のポイントをたくさん見つけられたことを実感することができた。これにより、友達との関わり合いもこれまで以上に広がった。表7の体育作文に書いている友達との関わりの方数の変容からも、そのことがうかがえる。

「技の指導系統表の作成」と「体育科授業モデルの構築」の研究成果を踏まえた上で、今回の研究授業が運動に親しむ資質・能力を育てる授業づくりになり得ていたかどうかについて考える。アンケートの「マット運動は好きである」の項目に注目すると、事前に比べて事後では数値が伸びていた。また、「体育の時、うまくできる方法を考える」の項目において、一番大きな変容が見られたことや、「上手な子を見て、僕もそれをまねしてみた。」「友達の発表を見ている時に、『頑張れ。』と言えた。」等の体育作文の感想から、子供がマット運動において、「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方の価値に対する気付き

を得たことがわかる。さらに、「頑張って側転をしました。最初できなかったけど、だんだん楽しくなってきました。」と、継続し、努力することで学んだ喜びについて書かれている感想も多くあり、今回実践した授業モデルは、子供の運動に親しむ資質・能力の育成につながる体育科授業であったと考える。

(2) 課題

体育科授業モデルの構築については、本単元での技能習得の面において、C評価とB評価、B評価とA評価の差がごく僅かな子供もいたことから、技のポイントを見つけた後、技能につなげる手立ての在り方に課題があると考え。今回、技能面では、サーキット運動の導入において主運動とのつながりを意識して取り組んだが、まだ年間を通した継続的な取り組みになっていないこともあり、その効果は小さかったと考える。また、事前・事後アンケート(表5)の「休み時間は、外で遊んでいる」の事後数値が事前と比べて変化がなく、全体的な伸びは見られなかった。同様に、「何かスポーツを始めたいと思う」の肯定的な割合はやや向上したものの、他の項目と比べて低い値となっている。今後の体育科授業において、子供が運動の楽しさやおもしろさを味わい、運動を通して考えたことや気付いたこと、身に付けた動きが活用できるような機会を考え、生涯にわたってスポーツに親しむことの大切さに気付かせるよう心がけたい。

(3) 今後に向けて

今回の研究においては、子供の体育ノートから「これからも家で挑戦したいです。」や、「今日は見学だったけど、みんなと同じように技を考えて、家で練習する。」などの感想もあり、一定の成果を上げることができた。また、技能習得に関して、今回の研究は、分解図を使って、技の正しい動きを視覚的につかむことで、子供たちの見合いや教え合い活動に効果が見られた。今後は、ICTを活用する方法も取り入れ、技の連続写真へと移行するなど、さらに動きのイメージがつかめるようにしたいと考える。また、タブレット端末や動画コンテンツを併用し、子供自身の動きが視覚的にわかる方法等も考えていきたい。

今後も子供の体力向上につなげるため、運動に親しむ資質・能力を育てる体育科の授業づくりを大切に、他の運動領域においても引き続き取り組んでいこうと考えている。

<注 釈>

注1 「運動に親しむ資質・能力」とは、小学校学習指導要領解説体育編において、運動への関心や自ら運動する意欲、仲間と仲良く運動をすること、各種の運動の楽しさや喜びを味わえるように自ら考えたり工夫したりする力、運動の技能などを指している。

注2 選択肢については、「とても思う」、「まあまあ思う」、「あまり思わない」、「まったく思わない」の4つで行い、それぞれを順に、4点、3点、2点、1点として合計した数値を回答者数で割ったものであり、最大値は4となる。

<引用文献>

※1 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編『新版 体育科教育学入門』p.27 鈴木理 大修館書店(2010)

<参考文献>

- ・小澤治夫『子どもの発達段階に応じた運動指導の工夫』教育開発研究所 教職研修8月号(2009)
- ・小畑治・岡澤祥訓・石川元美・森本寿子『小学校体育科における器械運動の「技の配列表」作成の試み』奈良教育大学 教育実践開発研究センター 研究紀要第21号(2012)
- ・佐野金吾『学校の評価活動 学校と子どもの新しい評価』教育開発研究所(2001)
- ・根本正雄『体育の基本的授業スタイル - 1時間の流れをつくる法則 - 』明治図書(2014)
- ・『平成29年度 小学校新学習指導要領ポイント総整理』東洋館出版社(2017)
- ・平成29年度 和歌山県教育委員会 学校教育指導の方針と重点 8健やかな体の育成(2017)
- ・細江文利・鈴木直樹・成家篤史・水島宏一・齋地満『動きの「感じ」と「気づき」を大切にしたい器械

『運動の授業づくり』教育出版（2012）

- ・「自ら探求し続ける児童の育成～学びのあしあとが残るノート作りを通して～」田辺市立田辺第一小学校 研究紀要(2015)
- ・和歌山県教育委員会 体力・授業力アップモデル校 取組事例集「子供の体力向上課題対策プロジェクト」（テーマ2：体力向上のためのPDCAの実践研究）」（2017）